日本國天皇家論
6章　日本書紀　持統天皇

近畿天皇家の始まり

近畿天皇家の始まり、大王の遠の朝庭

神武に始まる九州天皇家は、天武まで北九州に実在した。壬申の年に、日本國天皇家に反乱して勝利した九州天皇家天武は、初めて、日本國天皇の地位に就いた。だが、天武は太宰府に居た。天武は奈良には遷らず、太宰府で日本を治めた。この時、日本の首都は太宰府であったといえないことはない。しかし、持統は太宰府で日本を統治しなかった。その理由は分からない。草壁皇子が亡くなったことが理由かもしれない。或いは、天武7年12月の筑紫國の大地震で国中が大被害を被ったことが原因かもしれない。或いは、天武12年12月庚午(17日)の詔勅、「諸の文武の官人及畿内の有位人等、四の孟月(はじめのつき)に、必ず朝参せよ。若し、死病有りて集はること得ずは、当司、具に記して法官に申し送れ」という法令に関係があるかも知れない。四の孟月とは春夏秋冬の最初の月である、一月、四月、七月、十月である。これらの月の一日に、畿内(関西)から太宰府に高官が来ていた。彼らが持統に奈良に戻ることを要請したのかもしれない。奈良は持統の父、日本國天皇、天智の國である。なぜ、持統が夫の國、九州を去り、里帰りすることを決めたか、検証する史料はない。だが、持統四年の即位は、奈良藤原京、大極殿である。

太宰府は天武と持統が居た京である。藤原京は持統が遷った京である。持統の代は太宰府の持統朝庭と藤原京の持統朝庭の二つの朝廷が存在した特異な時代であった。人麿はこの歴史状況を歌った。

柿本朝臣人麿、筑紫國に下りし時、海路にて作る歌二首
304　大王の　遠の朝庭と　あり通ふ　島門を見れば　神代し思ほゆ

大王とは持統である。上の句には持統の代の特別な政治状況が詠われている。「朝庭」とは「宮」ではない。「朝庭」とはもともと大極殿と前庭をさす言葉である。人麿の歌は条坊都市である「京」と大極殿の存在を前提としている。人麿は持統の朝庭(京)は二つ存在することを詠っている。通常、このようなことはない。国家の朝廷は一つである。だが人麿の歌はその常識を超える。持統の代には、「遠い朝廷」と「近い朝廷」、この二つの朝廷が存在した。

島門を見れば　神代し思ほゆ

「島門を見れば」と詠う。作歌場所は「島門」の近く、船がしきりに往復する海路である。「島門」とはどこか？古来、様々に検討されてきた所であるが、決め手はない。

現在、この地名が残る場所として、北九州市遠賀町に「嶋門神社」「島門橋」がある。ここは「島門」と呼ばれている。その北に、「大君」という地名もある。故に、人麿の歌の舞台はこの辺り、と推定する人もいる。現代地名をもとに、歌を解釈しているが、しかし、ここは神代の舞台ではない。

「島門」は固有名詞ではあるが、現在に残る「島門」という地名にこだわる必要はない。人麿は、「島門」を見て「神代」を想起すると歌っている。

人麿は神代のいかなる史実を思い起こしていたのか。「國生み」である。イザナギ・イザナミの「國生み」の舞台は、彦島を中心とした関門海峡であった。しかし、現在、ここに、「島門」と伝えられる場所はない。だが、手が

かりはある。「島門」という言葉は、「島と島の門」という意である。彦島小戸には「門」という名前が付いた有名な名前がある。「穴門」である。彦島と下関市東大和町の間の細い水路は、古来、「穴門」と呼ばれてきた。イザナギ・イザナミは、この水路、この「穴門」を通って、国生みに出発した。「泉國（よもつくに）」から帰ったイザナギが禊ぎをした、「筑紫の日向の橘の小門」も、同じ彦島の「穴門」である。現在、「小門（おど）」と呼ばれているこの彦島瀬戸が、「島門」と呼ぶにもっともふさわしい。

> 伊邪那岐命、既に還りて、乃ち追ひて悔いて曰はく、「吾前に不須也凶目き汚穢き處に到る。故、吾が身の濁穢を滌ひ去てむ」とのたまひて、則ち往きて筑紫の日向の小戸の橘の檍原に至りまして、禊ぎ除へたまふ。遂に身の所汚をすすぎたまはむとして、乃ち輿言して曰はく、「上つ瀬は是太だ瀬速し。下つ瀬は是瀬弱し。」とのたまひて、便ち中瀬に濯ぎたまふ。　（日本書紀神代）

彦島瀬戸には「上瀬・中瀬・下瀬」の三つの瀬が存在する。このように直角に曲がる特異な瀬は、日本中探しても、他にはない。左目を洗った時に産まれたのが天照大神である。「天照」とは「天（あま）の照」という意味の名前である。天照大神が「高天原」を統治することになった。「高天原」とは「高地性の天（あま）の原（ばる・集落）」という意味で、彦島老の山公園をさす。

神武が東征に出発した「吉備」も、この「嶋門」の近く存在した九州天皇家の「吉備」であった。神代の歴史は全てこの「門」から始まった。神代を思うにこれほどふさわしい場所はほかにない。「島門」とは彦島と東大和町の瀬戸の出入り口である。

筑紫國に下りし時、海路にて作る

人麿は筑紫に下った時、この歌を作った。題詞はそのように書いている。そして、その道は海路だったと説明している。この「海路」という説明には何が込められているのであろうか。たとえば、人麿が奈良から筑紫（博多）に下ったと考えてみよう。その交通路は瀬戸内海である。奈良から博多への交通路はこの海路のみで陸路はない。この場合、わざわざ海路と書き加える必要は無い。

題詞の海路は陸路を前提とした言い方である。人麿は奈良から博多に下ったのではない。人麿は奈良にいたのではない。では、人麿はどこにいたのか。石見國である。人麿は石見の國の国司として石見國にいた。人

麿が居た石見國は島根県ではない。九州天皇家の石見國、苅田町である。人麿が石見國の妻と別れて上京する時に歌った歌がある。

柿本朝臣人麿、石見國より妻に別れて上り来る時の歌　二首

131　石見の海　角の浦廻を　浦なしと　人こそ見らめ　潟なしと　人こそ見らめ　よしゑやし　浦はなくとも　よしゑやし　潟はなくとも　鯨魚取り　海辺を指して　柔田津の　荒磯の上に　か青なる　玉藻沖つ藻　朝羽振る　風こそ寄せめ　夕羽振る　波こそ来寄れ　波のむた　か寄りかく寄り　玉藻なす　寄り寝し妹を　露霜の　置きてし来れば　この道の　八十隈毎に　萬たび　かへり見すれど　いや遠に　里は放りぬ　いや高に　山も越え来ぬ　夏草の　思ひ萎へて　偲ふらむ　妹が門見む　靡けこの山

反歌二首

132　石見のや　高角山の　木の際より　我が振る袖を　妹見つらむか

133　小竹の葉は　み山もさやに　乱るとも　我れは妹思ふ　別れ来ぬれば

人麿は天武三年に石見の国守に任ぜられている。(石見國風土記)　この妻との別れ歌は石見國から京(太宰府)へ上る時の歌である。歌の調べは悲壮である。楽しい上京ではない。晩年の人麿の人生は暗い。その暗さを予感させるような歌である。この時の上京は陸路である。奈良時代、奈良から太宰府に向かう人々は行橋市で船を降り、陸路を使った。関門海峡の難しい浪を避けたのである。この時の人麿の上京路も、苅田－行橋市－田川市－太宰府という陸路であった。

だが、人麿の304番歌は海路である。海路とは関門海峡を通過する。苅田からどのようにして博多に向かったか。乗船は九州天皇家の都があった近江(小倉南区)の大津ではなかろうか。

遠の朝庭

人麿がこの歌を作った時は、持統の朝庭が二つ存在したという特異な時代であった。二つの朝庭とは太宰府と藤原京である。太宰府は天武（持統）が居た京である。藤原京は持統が遷った日本國の京である。

太宰府は京と呼ばれていた。天武は壬申の乱に勝利して即位し、この京に入った。天武治世はこの京である。天武紀に登場する「大極殿」「大殿」とは太宰府の大極殿であった。ところが、藤原京は日本國の京であった。持統はその四年、太宰府を去って、藤原京に遷った。奈良で日本を統治しようとしたのである。近畿天皇家は持統に始まる。人麿の304番歌はちょうどその時の歌である。

太宰府を「遠の朝庭」と云っても藤原京を「遠の朝庭」と云っても、用語上は全く問題はない。現在、持統が居る藤原京から見れば太宰府が「遠い朝庭」であるし、反対に天武、持統がいた朝廷、太宰府を基本と考えれば藤原京が「遠の朝庭」である。どちらとも考えることができるし、どちらをとっても問題はない。通説は、太宰府を「遠の朝庭」としている。

人麿はどのように見ていたのであろうか。また人麿はどこにいたのであろうか。人麿は九州天皇家の「近江（小倉南区）」の大津から乗船し、彦島小戸まで来た。その時に、関門海峡を通る船団を見て、「遠の朝庭とあり通ふ」と歌った。蟻の行列のように多くの船が「遠い朝庭」に向かっている。

これらの船はいずれの朝廷に向かう船だったのか。太宰府か、それとも、奈良藤原京か。人麿は筑紫へ下る途中であった。ここで多くの船に出会った。これらの船は、筑紫に向かう船ではなく、奈良に向かう船だった。列をなして多くの船が、遠い奈良へ、奈良へと向かっている。人麿は、その理由はわからないが、奈良へは移らず、北九州に残っていた。持統は奈良に遷都した。持統朝廷の閣僚やその一族も奈良へ奈良へと向かっている。その船団が目の前を通り過ぎていく。

持統の朝廷は遙かに遠い。人麿の心の中の持統の朝廷はいっそう遠い。

> 彦島、この島の門から伊邪那岐命伊邪那美命は國生みに出発し大八洲を建国した。同じように、九州天皇家の始祖、神武もこの嶋の吉備の國から東征に出発した。歴戦の末、香春岳の東南の橿原の岡に宮を建て倭（やまと）の國の建国を宣言した。
>
> そして、彦島の「嶋の宮」にいた天武の代に、遂に、日本國を打ち倒して、天武は天皇の地位に昇り、太宰府で天下を支配することになった。この嶋の門から、三度、九州天皇家は戦いに出立し、勝利した。
>
> ところが、持統は九州を去り、日本國の王都・藤原京に遷ってしまった。多くの船が遠い藤原京の持統朝庭へ、蟻の行列の如く、向かっている。
>
> 全てはこの島門から始まったのだ。

作歌場所は関門海峡の巌流島付近であろう。北九州は持統の夫、天武の母国である。人麿の故郷も北九州・苅田だった。神武に始まる天皇家は九州に存在した。壬申の乱に勝利した天武は、日本の天皇の位に昇り、太宰府で全国を統治した。天武が亡くなり、皇太子草壁も亡くなった。持統は夫の國、九州を去り、父の國、日本國へ戻ってしまった。今や、朝廷は、遙か遠い遠い藤原京にある。

柿本朝臣人麿、筑紫國に下りし時、海路にて作る歌二首

304　大王の　遠の朝庭と　あり通ふ　島門を見れば　神代し思ほゆ

日本國天皇家の白村江での敗戦。天武の蜂起。日本國天皇家の滅亡。天武の天皇即位。太宰府の天武朝廷。持統の藤原京への遷居と即位。近畿天皇家の始まり。このように歴史は、めまぐるしく、動いてきた。関門海峡・彦島の「島門」はその歴史の始まりであった。

人麿は九州天皇家の持統期に生きた歌人である。太宰府と藤原京、この二つの朝庭を結んだ歌が「遠の朝廷」の歌だった。

人麿が詠った嶋門
九州天皇家の歴史舞台
関門海峡